

---

# 繰り返し、繰り返す

大羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

繰り返し、繰り返し

### 【Nコード】

N2812U

### 【作者名】

大羽

### 【あらすじ】

「ねえ、今日って何月何日だったけ？」「月×日だよ」  
変わらない質問を繰り返す彼女と、変わらない答えを繰り返す彼の  
お話。

## 彼の世界

「ねえ、今日って何月何日だったけ？」

「月×日だよ」

六度目の質問に、僕は答える。

「そう」

さもつまらなそうにそう言って、彼女は人混みに紛れていった。

僕はそれを人の波に押されながら見守る。朝のホームには人が溢れていた。

彼女を初めて見かけたのは六日前。

通学する中高生や出勤途中のサラリーマンで溢れる駅のホームで、彼女は灰色の柱に寄りかかって目の前を通過する人々を眺めていた。

世の中の全てがつまらない、といった彼女の表情が気にかかり、なんとなく横目で見ているうちに、ふっと目が合った。

彼女はとても驚いた顔をして、ほんの少しだけ、嬉しそうに口元を緩める。

彼女の反応を不思議に思いながら、その日はいつも通りに学校へ行った。

翌日、電車のドアから押し出されるようにホームに降り立つと、

灰色の柱の前に昨日見かけた彼女がいた。

またいる。

僕が彼女の方を向くと、彼女も僕に気がついた。

「ねえ、今日って何月何日だったけ？」

ざわざわと雑音が飛び交う朝の喧騒の中でも、何故か彼女の声は

僕に届いた。

僕以外の人間は、彼女の声に反応を示さない。見向きもしない。皆、自分のことで手一杯なのだろう。

それを思うと、無視するのは気が引けた。

「月×日だよ」

僕の答えを聞いた彼女はどうしてか、

「……そう」

と、ちよつと残念そうに呟いて、寄りかかっていた柱から背中を離した。

そして、僕が使う出口と反対の出口へ流れる人の群れに紛れてしまった。

次の日も、その次の日も、彼女は僕に日付を尋ねた。

その都度、僕は律儀に答えを返した。

彼女とは、この時間のこの場所でしか接点がない。

このとても奇妙な関係を、僕は嫌なものとは思わなかった。

願わくば、もう少しだけ、この日々が続いて欲しいとさえ思っていた。

そして七度目の問答をした日。

学校の帰り道で、僕は彼女に会った。

人のほとんどいない、夕暮れの道。

何の変哲もない民家と、さして特徴もない公園に挟まれた、実になんてことのない道に、彼女は当たり前のように立っていた。

すぐ傍まで近付いて僕はようやく彼女のことに気が付き、びっくりして立ち止まった。

「こんにちは」

思いがけない出来事に、僕の頭は上手く働かない。

「お別れを言おうと思って」

驚く僕に、彼女はそう切り出した。

「お別れ？」

ちくりと心臓の辺りが痛む。しかし、それよりも気になることがあった。

朝すれ違うだけの僕にわざわざお別れを言いに来たのか？ 何故？

「うん。なんだかんだで長い付き合いになったし、一応言っところかなって」

「……意味が、分からないんだけど」

何を言っているんだろう。

長い付き合いだって？

たった一週間、僅かな言葉を交わしただけだというのに？

「ねえ、今日って何月何日だったけ？」

困惑する僕の反応を楽しむように、悪戯っぽく彼女は言った。

「 月×日、だけど……」

半ば条件反射で答えを返す。

このやり取りももう終わりなのか、とぼんやりと考えた。

「25回目」

「えっ？」

「この質問も、この答えも、もう25回目」

突拍子もない言葉に何も言えず、僕は押し黙る。

「分からない？」

分からないよ。

心の中で答えるも、声にはならなかった。

「そう……」

とても悲しそうに、とても残念そうに、彼女は呟き、俯いた。

それから僕に背を向けて、

「バイバイ」

別れの言葉を落としていった。

オレンジ色に染められた彼女の後ろ姿を、僕はただ突っ立って見送った。

何かなんだか分からなかった。

けれど、もう彼女と会うことはないんだと、それだけははっきりと理解していた。

ああ、また明日から、いつも通りの日常が続いていくのだ。  
じわりと、景色が滲んでいった。

## 彼女の世界

「ねえ、今日って何月何日だったけ？」

「6月15日だよ」

23度目の質問に、彼は答える。

「そう……」

そつと呟く。期待していた答えを得られなかったことに、微かな落胆があった。

私はそのまま、駅の人混みに紛れる。私を見送る彼の視線を感じながら。

朝のホームには人が溢れていた。

気が付いたのが何月何日だったのか、正確な日にちは分からないけれど、私は気付いてしまった。この代わり映えのしない日常に私だけが。

最初は既視感。デジャヴというやつだった。

初めてなのに、初めてな気がしない。前にもこんなことがあったような。

そんな、言ってみれば誰にでもある感覚。

もちろん、最初のうちはそれほど気にしていなかった。だけど、一日のデジャヴの回数が両手の数では足りなくなってくると、さすがに意識せざるを得なくなった。

頻繁に訪れるデジャヴによって、徐々に、私の心には言い知れない不安感が募っていった。

何かが違う。でも何が違うのか分からない。

そうして自分や周りの行動に微かな違和感を感じつつづけた私は、違和感の正体に、自分の身の回りに起こっている異常に、気付いてしまったのだ。

23度目の質問をした翌日、電車から押し出された彼が私を見る。駅の柱に寄りかかってそれを待っていた私は、24度目の質問を投げかけた。

「ねえ、今日って何月何日だったけ？」

彼はいつも律儀に答えてくれる。

「6月15日だよ」

いつも、同じ答えを。

「そう」

もはや心は動かなかった。返された言葉だけを受け止める。

何度となく繰り返した期待と、そしてその度に味わう落胆。繰り返す度に、期待は小さく、落胆も同じだけ小さくなった。

もう変わりはないのだろうか。人混みに埋もれながら、私は諦めとともに噛みしめる。

ああ、今日もまた、いつも通りの日常が始まるのだ。

何ひとつ変わらない日常が。

登校時間はとくに過ぎているけど、私は学校には行かない。行っただってしょうがないから。

制服姿の私がぶらぶらと街を歩いていても、誰も咎めない。だって誰も私に気付かないから。



周りを歩く人達にとって、私はこの時間、ここにいるはずのない存在なのだ。

そこにいない者には誰も反応を示さない。示せない。そういう風になっている。

携帯電話を取り出して時間を確認する。デジタルな数字は午前10時を示していた。

この時間だと、学校では英語の小テスト中かな、と何気なく考える。

居眠りしてる坂上君を先生が叩き起こしているころだろうな。

その場になくても分かった。覚えているのだ。飽きるほど見た光景が、自然と脳裏に浮かんだ。

「あ、そうだ」

思い出そうとしなくても出てくる小テストの解答の数々を頭の隅へと追いつかす作業の途中、私は日々の日課をこなしていないことに気が付いた。

鞆から小さなメモ帳を取り出して、パステルカラーの表紙を捲る。一枚目の紙には、6月16日の日付と、びっしり並べられた私の字。これは即席の日記帳。とても大切な、私の心の拠り所だ。

ぱらぱらとページを飛ばして、白紙のページに辿り着く。私は白い紙の左上に、日付だけを書く。他には何も書かない。

ぼんやりと、私は記した日付に目を落とした。

10月22日。今日の本当の日付、だと思う。気付いたのが何月何日か分からないから、あくまで私の感覚では、だけど。

何度も何度も同じ日を繰り返す中で、このメモ帳だけは過ぎていく時間を感じさせてくれる。私は何も間違っていない、おかしくなれないと、証明してくれる。

私が正気を保っていられるのは、この日記と、そして彼のおかげ。

人のほとんどいない、夕暮れの道。

何の変哲もない民家と、さして特徴もない公園に挟まれた、実になんてこともない道で、私は彼を待っていた。

私は彼の名前を知っているし、通う学校も、通学路どころか家まで知っている。

反対に、彼は私のことを何一つ知らない。知らない、というより、忘れていたと言った方が正しいのかもしれない。

朝の駅のホームで彼と視線が合ったとき、私は泣き出しそうなくらい嬉しかった。誰もが私をいない者として扱う中で、彼だけは私の存在に気付いてくれた。

事情を話しても信じてはくれなかったけど、それでも、確かな『変化』があったことがなにより嬉しかった。

だけど、胸に湧いた希望はすぐに消えた。

彼が私に気付いた一週間後、彼は私のことを綺麗さっぱり忘れていたのだ。冗談でなく、本気で彼が私のことを忘れてしまったんだと悟ったときの、あの血の気がすうっと引いていく感覚は、もう二度と味わいたくない。

諦め切れなかった私は、彼と何度も話をした。そうして分かったことは、彼の記憶が一週間前後でリセットされるということと、私に気付いてさえくれない週もあるということ。前回は、前々回も、私の声は届かなかった。

今では彼が気付いてくれることを願いつつ、日付を尋ねることしかしていない。

そして、それも今日で終わり。

私は今日、この街を出る。

街を出て、私に気付いてくれる人を探すのだ。

ここでこうして待っているのは、彼にお別れを言って、私なりのけじめをつけるため。

心残りがないように。

ああ、でも最後に一度だけ。彼にあの質問をしてみようか。  
心残りがなくなるように。  
そろそろ、彼が来る時間だ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2812u/>

---

繰り返し、繰り返し

2011年6月26日22時21分発行